

※「日本髪用髪飾り」のつづき

簪

日本髪を彩る簪は、江戸時代後期から明治期にかけて必需品的装身具として発達し、大正時代へ、さらに昭和初期へと引き継がれた。

簪は櫛に比べると流行の影響を受けることが少ない。ここで紹介する簪の多くも昭和初期にも用いられていた。

日本髪用簪には、大別すると、平らな「平打簪」と宝石を丸く研磨した「玉簪」がある。

図1-8-29と図1-8-30はその着用図。いずれも後ろ挿し。



図1-8-29

銀平打簪着用図

明治41年11月『婦人画報』  
より



図1-8-30

玉簪（サンゴ）着用図

大正7年5月『婦人世界』  
より

ここでは、最初に大正前期頃流行の貴金属の平打簪とべっ甲などの平打状簪を紹介し、次に各種の玉簪を紹介する。

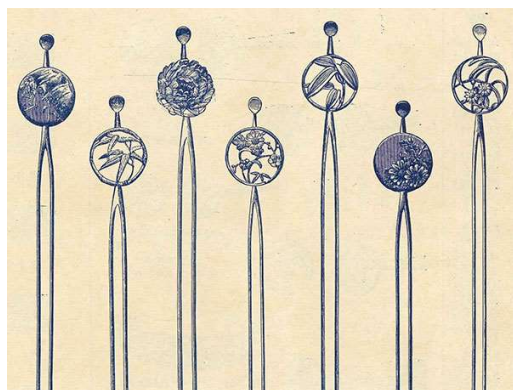


図 1-8-31

金の平打簪

K18、K20、K22 にプラチナ交り

三越呉服店

大正 3 年『三越』付録「金銀細工帯留

と頭飾品目録」より

図 1-8-31、図 1-8-32 はカタログからの平打簪。  
これらのカタログに出ていた簪はすべて金製で、ほとんどに一部  
プラチナが使われている(プラチナ交り)。大正期にはプラチナは金  
を大きく凌ぐ高価な貴金属であり、こうした簪は明治期にはあまり  
見られない。  
また足はすべて松葉形で、明治期にしばしば用いられていた U 字  
形の蛙股足かえるまた(『日本の宝飾文化史』図 8-45) は姿を消しスッキリし  
た形になった。

その他、上部の搔軸かきしくの長さ(長すぎず、短すぎず)、松葉足の付け  
根が広がりすぎていないこと、そして飾り部分の模様の時代感など  
も、明治期以前の簪と大正期以降の簪を見分けるポイントとなる。



図 1-8-34  
金薄肉彫り透かし平打簪  
抱き茗荷みょうが図



図 1-8-33  
金 (K20) 透かし平打簪  
プラチナ交り  
菊と夾竹桃きょうちくとう (?) 図

図 1-8-33、図 1-8-34 は金の平打簪の実物。図 1-8-35 は金の上に蒔絵・螺鈿を施した平打簪。金簪のほとんどは潰されてしまっていて残っているものは僅かである。

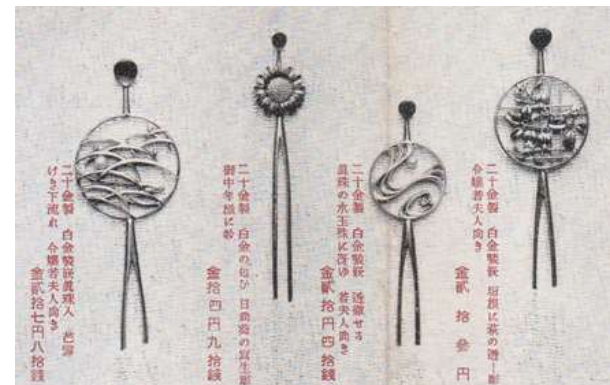


図 1-8-32  
金の平打簪  
K20 プラチナ交り  
尚美堂  
大正 5 年 9 月 『尚美堂時報』より



図 1-8-37

銀透かし平打簪

孔雀と菊図

孔雀の尾羽<sup>おぼね</sup>を強調したデザインは大正前期によく用いられた。



図 1-8-36

銀透かし平打簪

笹と菊図



図 1-8-35

金 (K18) 蒔絵・螺鈿簪

桜と梅図

裏にも蒔絵・螺鈿で桜と松のめでたい模様。

1-8-36、図 1-8-37 から図 1-8-38 は銀の透かし簪。そのなかから一部を紹介する。図 1

以上は金、銀など貴金属の簪だが、明治期ほどではないが、べつ甲の平打状の簪の愛好者も多かった。また、べつ甲を模した安価なセルロイドの簪も作られた。

図1-8-41、図1-8-42はべつ甲簪、図1-8-43はセルロイド簪。



図1-8-40  
銀に金銷し透かし平打簪  
菊図



図1-8-39  
銀に金銷し透かし平打簪  
鼓と葉図



図1-8-38  
銀透かし平打簪  
白詰草と菊図

金簪への憧れは強かったがすべての女性が付けられるわけではなかった。そこで図1-8-39、図1-8-40のような銀に金銷しきんけ（めっき）を施した平打簪がたくさん作られた。

た（図1-8-44）。この頃には、べっ甲に蒔絵・螺鈿を施した優雅な簪も作られてい



図1-8-43  
セルロイド簪  
菊図



図1-8-42  
扇子形べっ甲簪  
中央に三ツ柏紋



図1-8-41  
真珠入りべっ甲簪  
菊模様の花芯部に小粒真珠



図 1-8-44  
べっ甲蒔絵螺鈿簪  
竹図

ここからは大正前期に用いられた各種の玉簪を見ていく。玉簪用の宝石には、江戸時代からのサンゴ、めのう、水晶類、そして明治期からの孔雀石（マラカイト）、ヒスイなどが引き続き用いられた。天然のヒスイやサンゴが身につけられない女性のためには、遠目には見分けが付きにくい着色ガラスによる模造品が天然の何倍も作られた。

図 1-8-45 はサンゴの玉簪。この時代には地中海産サンゴ（胡渡こわたりサンゴ）に替わり、主に日本産の高知のサンゴが使われた。



図 1-8-45  
サンゴの玉簪  
K18 足  
色の好みはいろいろだが、大正期には柔らかな色合いの桃色系に人気があった。

図 1-8-46 は透明度が高く、冴えた色の琅玕質ろうかんのヒスイの玉簪。白地に緑色が交ったものや暗緑色のものは多かったが、この光沢のものは数が少なく貴重。

図1-8-49はオーソドックスな丸玉の水晶簪。図1-8-50は、表面にファセットカットを施した切子玉きりこの水晶簪、図1-8-51はファセットカットの紫水晶（アメシスト）の簪。いずれも甲府製だろう。



図1-8-48  
孔雀石（マラカイト）の玉簪  
金色合金（模造金）足

図1-8-48は孔雀石（マラカイト）の玉簪。濃い緑色と特有の縞模様を好む女性に人気だった。



図1-8-47  
めのうの玉簪  
銀足  
玉表面は上品にマット仕上げ。

図1-8-47は、めのうの玉簪。大正時代にはこのように、耳搔き部から軸の上部までがめのうの玉簪も作られた。



図1-8-46  
ヒスイの玉簪  
金足  
高価だった琅玕質のヒスイ。

大正時代や昭和初期にはセルロイドやガラスの模造サンゴ玉やガラスによるヒスイ玉の模造品がたくさん作られた。  
図1-8-52はサンゴの模造品。図1-8-53はヒスイの模造品。いずれもガラス製。



図 1-8-51  
紫水晶の切子玉簪  
銀（金銷し）足  
大正前期末以降のもの。



図 1-8-50  
水晶の切子玉簪  
銀（金銷し）足



図 1-8-49  
水晶の玉簪  
白色金属足



図 1-8-53  
砂金石（アベンチュリン・ガラス）の玉簪  
白色金属足

サンゴ、ヒスイのガラス模造品以外にも砂金石または茶金石と称されたアベンチュリン・ガラスの玉簪もあった（図 1-8-53）。この簪は江戸時代末期から用いられていた玉簪（『日本の宝飾文化史』図 6-8）。まるで砂金でも入っているかのように輝くところが好まれ大正前期から昭和初期にも用いられている。



図 1-8-52  
ヒスイの模造品（ガラス）  
金色金属足  
失透処理により透明度をおさえたガラスを使用。



図 1-8-51  
サンゴの模造品（ガラス）  
白色合金足  
サンゴに似てはいるが、表面の光沢がテカテカしていて不自然。